

ギリシア神話『オデュッセイア』の一考察

A Study of Greek Mythology, “Odyssey”

和田 正美*

Masami Wada

抄録

本稿は、大学での講義「西洋教育史」に使用する教科書を作ることを想定して作成したものである。今回は“古代ギリシアの教育”の理解の素地になるギリシア神話、特に“オデュッセイア”を取り上げた。その時代の教育思想をほんとうにわかるには、その国の歴史、文化を十分理解していなければならない。大学は学問の場であるかぎり、幅広い領域の知識を統合化する教育が必要であることは言うまでもない。しかし現在、大学の講義時に使用される講義内容に相応しい教科書は皆無といってよい。専門書は豊富にあるが、大学の講義を想定しては書かれていないのである。

“オデュッセイア”を通じてホメロスの人間観を明らかにすることにより、紀元前8世紀頃の古代ギリシアの教育観を、また、現代の教育のあるべき姿を考える糸口としたい。

Abstract

The first purpose of this study is to understand the anthropology of Greek mythology's epic poem, “Odyssey” written by Homer in ancient Greece. The second purpose is to make a schoolbook on “European educational history”. We need to understand the culture and the history of the times to understand their educational thoughts. Greek mythology is one of the ways to understand the education of ancient Greece.

1. ホメロスと『オデュッセイア』

ホメロス（Homer, 英語名ホーマー）は、紀元前8世紀の古代ギリシアのイオニアの伝説的な詩人であり、古代史に燦然と輝く二つの英雄叙事詩『イリアス』と『オデュッセイア』の作者であるといわれている。

『イリアス』と『オデュッセイア』は西洋文明における最古の筆録された文学の一つであるが、物語

* 人間科学部

そのものは古い口承詩に由来している。文字で書かれたものがない世界を想像すると、すべて口頭で表現され、長編で複雑な物語をテキストやノートなしで構成することは想像しがたい。トロイア戦争（紀元前1200年頃）で戦ったオデュッセウスとその冒険談は、ギリシアの暗黒時代を400年もの間、口承だけで生き残ってきたのである。

ホメロスは、クレタ文明（紀元前2000年から紀元前1400年）やミュケナイ文明（紀元前1600年から紀元前1100年）など、はるか昔から伝わる基本的な話を受け継ぎ、宮廷で娯楽のために詩を朗唱する吟遊詩人の伝統のなかで、叙事詩としての形を整えた。

『オデュッセイア』では多くの神が登場する。神々の父であるゼウス、知恵の女神アテナ、海の神ポセイドン、愛と美の女神アフロディッテ、神の使者であるヘルメス（ヘルメイアス）などである。ギリシア神話の神々は、議論好きで、虚栄心が強く、パワフルで、ときには愚かな一族である。古代ギリシア人たちは彼らを崇拜したが、神々の破廉恥な振る舞いについても尽きることなく語り続けた。

『オデュッセイア』の叙事詩を構成している話の多くは歴史的事実を含んでいるが、それ以上に神話的な出来事も含まれている。たとえば、秘薬で人間を豚に変える魔女キルケ、ロトス常食人、人間を食う一眼の巨人キュプロプス、美声で船乗りを誘惑する上半身人間（女性）下半身鳥または魚のセイレン、太陽神の雌牛などはホメロス以前に長い過去をもつ話である。古代トロイアとその戦争は考古学的研究により事実だったことが確かめられている。ポリス（都市国家）の文明やミュケナイ文明が生き生きと描かれている。しかし、こうした歴史に加えて、神々、怪物、幽霊など、神話や空想から取り入れた、より素朴で伝説的な要素も自由にまじりあっているのである。

『オデュッセイア』は、古代ギリシア文明時代の読者にとって、宗教的、倫理的な指導書としてというよりは、その社会の伝統、価値観、特性を代表するものとして存在した、また、西洋社会は『オデュッセイア』から、英雄や旅、冒険、家族、愛、社会、そして価値観について学んできた。『オデュッセイア』は、どの時代でも模倣されてきた。

ペリクレス時代（紀元前5世紀）のギリシア悲劇も『オデュッセイア』から多くの要素を借りている。ローマの詩人ウェルギリウスの叙事詩に登場する英雄『アエネイス』も、オデュッセウスをモデルにしている。中世文学のイタリアのダンテの『神曲』の地獄篇も、近世のイギリスのシェイクスピア、アイルランドのジョイスの『ユリシーズ』を初め、多くの文学者がホメロスの作品から引用している。ギリシアの多くの美術、劇、哲学は、ホメロスの作品からテーマ、思想、場面設定、人物像などを借りている。そしてこれは今日まで続いているのである。このように古代ギリシアは文化と教養の多くをホメロスに負っている。また、それ以上に、「西洋文学の父」として、古代ギリシアの古典期、ヘレニズム時代、ローマ時代、ルネサンスから現代に至るまで、ホメロスを抜きにして文学を論じることはできないのである。

2. 『オデュッセイア』のあらすじ（参考文献・山室静著 210頁～214頁を参考）

トロイア戦争に勝利したギリシア軍は楽々と故郷に帰り着くことができなかった。ギリシア軍の総大将であるミュケナイ王アガメムノンは、嵐にあって艦船の大部分を失い、ようやく帰国したが、不実な妃クリュタイムネストラ（ヘレネの姉）とその情夫アイギストスに暗殺された。スパルタ王メネラオスは、

絶世の美女である妻ヘレネを取り返したが、凱旋の途中エジプトまで吹き流され、戦争の恐怖と多くの友人を失った苦しみから回復することができなかつた。『オデュッセイア』で、オデュッセウスの息子テレマコス、メネラオスのスパルタの町を、豊かではあるが、深い悲しみに満ちた場所として語っている。こうしたギリシア軍の不幸は、トロイア落城に際してのギリシア軍の蛮行が、神々を怒らせ、勝利の代償を払うようにしむけたのであると、ギリシア三大悲劇詩人の一人であるアイスキュロス（紀元前525～紀元前456）は言う。

「木馬の詭計」の発案者で、トロイア落城の勲功をあげた英雄オデュッセウスがひどい苦難にあって、長い間放浪と冒険を重ねなければならなかつたのも当然であつたろう。ホメロスの『オデュッセイア』は、主人公であるオデュッセウスがイオニア海の故郷イタケの島へ帰り着くまでの10年間の世にも不思議な冒険と愛をつづった帰国物語であり、冒険談的要素やお伽噺的要素が多くて親しみやすいため、『イリアス』よりよく知られている。『イリアス』と同様に24歌からなる長編英雄叙事詩である。

『オデュッセイア』は、『イリアス』でアキレウスを紹介したのと全く同様に、芸術（詩）の女神ムーサへ捧げる祈りの言葉で幕を開ける。これは話を始める契機としての重要な宣言とともに、自然な形で詩のなかに織り込まれている。

「ムーサよ、わたくしにかの男の物語をして下され、トロイエ（トロイア）の聖なる城を屠^{ほぶ}った後、ここかしこ流浪の旅に明け暮れた、かの機略縦横なる男の物語を。多くの民の町を見、またその人々の心情をも織った。己が命を守り、僚友たちの帰国を念じつつ海上をさまよひ、あまたの苦悩をその胸中に味わったが、必死の願いも空しく、僚友たちを救うことはできなかつた。…… 女神よ、ゼウスが御息女よ、なにとぞこれらのことごとをどこからなりとお気の向くまま、われらにも語って下され。」¹⁾（第1歌）

「かの男」とは、オデュッセウスのことを指し、オデュッセウスが経験した数々の苦難の旅の物語を、わたしの舌を通じて語ってください、と詩神ムーサに祈る。このようにして、ムーサが朗詠者に宿り、叙事詩の物語を語るのは、実は、ムーサであることになる。

オデュッセウスは、数々の戦利品を12隻の船に積み、大勢の部下たちとともに故郷イタケを目指していた。まず嵐に吹き流されてトラキアに着くが、そこには狂暴なキコネス人がいて、彼らとの戦いでオデュッセウスは72人の部下を失う。略奪してから南に進路を取り、今度はリビアの蓮食い人・ロトパゴス人の国に吹き着けられる。そこのロトスという甘い蓮の実を食べると、人の記憶を喪失させる力があり、これを食べた部下たちは故郷を忘れてこの土地に留まろうとしたため、オデュッセウスは、むりやり彼らを船に乗せて出帆しなければならなかつた。

ついでオデュッセウスの船団は、一眼の巨人族・キュクロプスの国に着いた。オデュッセウスは部下とともに酒壺を持って上陸し、キュクロプスの一人である最強のポリュペモスの洞窟の中に入り込むと、山羊や羊がたくさんいて、チーズがたっぷり盛られた籠も置かれていた。かってに宴会を開いているとき、ポリュペモスが帰ってきて、入口を大岩で塞いでオデュッセウスの一行を閉じ込めたあと、2人の部下をいきなり食べ殺してしまう。オデュッセウスは、ポリュペモスにワインを飲ませて酔い潰れて眠ってしまった隙に、丸太の先を削って尖らせ、先を熱し、この杭でポリュペモスの眼をつぶして盲目にした上、彼の飼っていた羊の腹の下に体を縛り付け、ポリュペモスに気づかれぬように洞窟の外へ出て、無

事に船で島を離れることができた。

怒った巨人ポリュペモスが父親の海神ポセイドンに訴えた。「大地を抱き、髪は漆黒のポセダイオンよ、聴いてください。…………… どうかレエルトスが一子、イタケに住み、城取りの異名をとったオデュッセウスめを、無事には帰国させないで下さるな。…」²⁾ (第9歌) トロイア戦争の間、一貫してギリシア側に味方をしていた海神ポセイドンの恨みをかうことになり、帰国はさらに困難を増し、一行は激しい嵐に襲われて、海上を漂わされる。ようやく風の神アイオロスの島に行き、乱暴な風どもを袋に閉じ込めてもらい、船はどうやらイタケの島に近づく。ところが、部下が袋の中には宝が隠してあるものと邪推して袋の口を開いたことから、船はまた吹き流されてキュクロプス族に似て野蛮な人食い巨人ライストリュゴネス族の国などに至る。ここで12隻の船のうち、オデュッセウスの乗っていた一隻を除いて、みな難破して命を失う。

やがて、オデュッセウスたちは魔女キルケが住むアイアイエ島に着いた。探索に行かせた部下から、キルケの館に招かれ接待を受けたが、彼女にすすめられた飲み物を飲み干したあと、豚に変身してしまったと聞かされる。オデュッセウスは、キルケの館へ向かう途中で、ヘルメスからもらった魔除けの葉草のおかげで、魔法を逃れたばかりでなく、部下たちをもとの姿に戻してもらった。美しい魔女キルケはオデュッセウスに惚れ込み、ここで1年を過ごす。

この地での生活は快適だったが、望郷の思いが次第に強くなり船出することにした。キルケは、オケアノスの向こうの死者の国・冥府へ行き、そこでテバイの高名な預言者テイレシアスの霊から帰国に関する予言を聞けと指示する。死者の霊と語り合って、英雄たちの運命や、自分の故郷の様子を聞く。テイレシアスの霊は、もしオデュッセウスがアポロンの聖牛に手を触れなければ、たとえポセイドンに敵意があっても、無事にイタケに着けることを予言する。

オデュッセウス一行は旅を続ける。上半身が人間の女性で下半身は鳥の姿または魚の姿をした海の怪物セイレン（サイレン siren（警笛）の語源となった）の島を通りすぎるときには、セイレンの魔力についてはキルケから警告されていた。ギリシア神話においては、セイレンは元々女神として信仰されていた。2人、3人、あるいは4人であるとされる。海の航路上の岸辺の岩に座って小鳥たちの歌声の粋を集めたようなすばらしい声で船人を惑わし、すべてを忘れさせて遭難、難破させる。歌声に魅惑されて殺された船人たちの死体が島に山をなしたという。

オデュッセウスは部下の耳に蜜蠟で耳栓をさせ、自分だけは歌を聞こうと、帆柱に身を縛り付けさせ、難を逃れる。単に歌が聞きたかっただけではなく、オデュッセウスが暴れだすと、歌に惑わされていると判断し船を進め、オデュッセウスが落ち着くともう安全であると判断したとも考えられている。惑わせなかった人間はないことを自慢に思っていたセイレンは、オデュッセウスを引き込めなかったことでプライドが傷つき、海に身を投げて溺れ死んだという。

ギリシア神話のイアソンのアルゴ号の冒険物語では、乗組員の一人だったオルペウス（ギリシアの伝統的詩人、音楽家）が琴を鳴らし、船員はその美しい音色を聞いてセイレンの声に惑わされずに済んだ。ホメロスの『オデュッセイア』、ゲーテの『ファウスト』などにセイレンが登場し、怪物としての性格が強まった。後世、人魚、水の精などとしても表現されるようになった。

しかし、魔の淵カリュブディスと怪物スキュレのいる難所では、部下6人が呑み込まれてしまう。次

には、アポロンの聖牛のいるトリナキエ島（現在のシチリア島だといわれる）に漂着する。風がないため、一ヵ月もこの島に足止めされることとなった。部下たちは空腹に耐えかねて、オデュッセウスの厳禁にもかかわらず、彼が眠っている間に、禁断の聖牛を殺して食べてしまう。そのためにゼウスは嵐を起こし、雷霆で船を撃った。

最後の一隻の船も砕かれ沈没し、ひとり生き残ったオデュッセウスは姿美しいニンフ（ギリシア神話の妖精）のカリュプソの島に漂着する。カリュプソはオデュッセウスにはげしく恋して、自分の許にいつまでも留まってくれるなら永遠の若さ（不老不死）をやろうという。カリュプソは利己主義と快楽の象徴のように考えられる。彼は7年間彼女の許で幸福に暮らす、故郷へのあこがれは強くなるばかりで、日ごとに浜辺に出て故郷の方を望みながら、帰国を神に祈る。そのころオリュンポスの神々の間では、オデュッセウスへの同情が高まっていた。特に女神アテナはひどく同情し、父ゼウスに「故郷へ返してやってほしい」と嘆願するほどであった。

ついに彼の祈りは聞き届けられ、ゼウスはヘルメス神をカリュプソのもとへ遣わした。カリュプソに彼を手放すことを伝える。彼は自分で筏を作って海に出るが、まだ怒りがおさまらないポセイドンは大嵐を起こし、筏は破壊されるが、海の女神レウコテエの情けで、オデュッセウスはパイエクス人の島に泳ぎ着く。王女ナウシカアの友達の姿に扮したアテナのすすめによって、衣類を洗濯に浜辺に来ていた王女ナウシカアが裸のオデュッセウスを見つける。王女は人目を避けるため、オデュッセウスを途中で足止めする。アテナが少女に扮して王宮につれて行き、彼はここで栄誉をもって遇され、宴会の席で吟遊詩人が詠うトロイア戦争の物語を聞いて涙を流し、素性を明かし、これまでの自分の冒険と漂流・漂泊の一部始終を語ってイタケの国へ送り返されることになる。

船は明け方にはイタケの島に到着した。パイエクス人の船員たちは、まだ眠っているオデュッセウスをそっと砂浜に降ろし、自分たちの島へ帰っていった。眠っているオデュッセウスに女神アテナが現われて、彼の留守中、妻ペネロペのもとには大勢の求婚者たちが訪れ、客人として居座って王宮の牛や羊など、貴重な食糧の蓄えを食いつぶしているとアテナは告げる。また、今すぐ王宮へ向かうのは危険だと忠告する。ペネロペは求婚者たちの追求をことわりきれず、老王ラエルテスの死装束が織り上がったら彼らの一人を夫に選ぶと約束するが、彼女は、昼間は機を織り、その布を夜こっそりときほぐし、結婚を引き延ばしているのだった。

オデュッセウスは、年老いた乞食に身を変えて、忠実な豚飼いエウマイオスの小屋を訪ねる。そこへ、父の行方を捜して旅に出ていた息子テレマコスも帰ってきて、互いに名乗りあい、共にペネロペの求婚者どもを片づける相談をする。その間にペネロペの計略は求婚者の一人に見破られ、いよいよ夫選びの宴会を開かなければならなくなる。

彼女は夫オデュッセウスの引いた強弓を持ち出して、これを引けた者を夫に選ぶという弓矢の競技会を開いた。出征前にオデュッセウスが使っていた強弓に弦をかけ、的にした12の斧の頭の穴を射抜いた者に嫁ごうと決めたのである。

求婚者たちはそれを試みるが、あまりにも弓が強すぎて、矢をつがえることすらできない。そこへ年老いた乞食姿のオデュッセウスが現われて、やすやすと12の穴を射抜いたばかりか、テレマコスともに求婚者たちに向かって次々と弓矢を放ち、片っぱしから射殺する。こうして20年もの間、夫を待ち

続けていたペネロペの誠実さは報われた。オデュッセウスは、ふたたびイタケの王に戻って、ペネロペとともに、年老いるまでイタケの国を治めるのであった。

3. 『オデュッセイア』の流れ

『オデュッセイア』は、『イリアス』の後篇にあたり、トロイア遠征の後、イタケ島の王オデュッセウスの冒険、オデュッセウスの息子テレマコスが父を探す旅、および、オデュッセウスが帰郷し、求婚者たちを倒す話の3つよりなっている。

『オデュッセイア』の詩は出来事が起こった順番どおりに書かれていない。物語は、オデュッセウスがイタケへ帰るほんの数週間前という、旅の途中から始まるが、これは叙事詩の典型的な方法である。妻ペネロペの求婚者たちを撃退し、妻と再会を果たすくだりだけが物語の最後に置かれ、年代順になっている。現代の小説や映画がよく用いるフラッシュ・バックの手法が介在している。この作品の順序は次のようになっている⁽¹⁾と⁽⁵⁾の目次を引用)。

「テレマコスの父を探す旅」(第1歌～第4歌)

神々の会議、女神アテネ、テレマコスを激励する。イタケ人の集会、テレマコスの旅立ち。ピュロスにて。ラケダイモンにて。

オデュッセウスの息子テレマコスが父の行方を探して旅に出る話。

「帰郷への旅」(第5歌～第9歌)

カリュプソの洞窟、オデュッセウスの筏作り。オデュッセウス、パイエクス人の国に着く。オデュッセウス、アルキノイスに対面す。オデュッセウスとパイエクスとの交歓。アルキノイス邸でオデュッセウスの語る漂流談、キュプロプス物語。

オデュッセウスのカリュプソからの逃亡、数々の試練、パイエクスへの旅の話。

「流浪の旅」(第10歌～第12歌)

風神アイオロス、ライストリュゴネス族、およびキルケの物語。冥府行。セイレンの誘惑、スキュレとカリュプディス、陽(エエリ)の(オス)神の牛。

オデュッセウスが神々、魔女、巨人、怪物たち、死者などに遭遇する冒険に満ちた物語。

「帰郷後の秩序の回復」(第13歌～第24歌)

オデュッセウス、パイエクス人の国を発ち、イタケに帰還。オデュッセウス、豚飼のエウマイオスに会う。テレマコス、エウマイオスを訪れる。テレマコス、乞食(オデュッセウス)の正体を知る。テレマコスの帰館。オデュッセウス、イロスと格闘す。オデュッセウスとペネロペイアの出会い、足洗いの場。求婚者誅殺前夜のこと。弓の引き競べ。求婚者誅殺。ペネロペイア、乞食(オデュッセウス)の正体を知る。再び冥府の物語。和解。

帰郷したオデュッセウスが求婚者たちを倒し、正当な立場である王、夫そして英雄の座につく話。

4. 『オデュッセイア』からの考察

①なぜ物語の順番をこのような形にしているか。

『オデュッセイア』の主なテーマは正当な王権である。息子テレマコスはまだ王に相応しい特性を身に付けていない。すぐにオデュッセウス自身の話に入らず、テレマコスの物語で回り道をするのかといえ、テレマコスにとって旅は、父親が王座に戻るのを助けるために、自分の経験を積むチャンスである。これは『オデュッセイア』のテーマでもある“永遠の命”に関わるものである。命は子ども、孫に継がれていく永遠の命、そのためにもテレマコスも立派に成長し、生き続けなければならないのである。

テレマコスの旅にはもう一つ重要な点がある。彼の旅には四つの王国、イタケ・ミュケナイ・ピュロス・スパルタが登場する。イタケは無秩序、ミュケナイも無秩序で、不貞や殺人、裏切り、復讐の巣窟である。ネストルの治めるピュロスは平和で暖かい都市である。スパルタは物質的に豊かではあるが、嘆きと悲しみの都市である。このようにその時代の社会道徳がよくわかるように歌われている点である。

オデュッセウスは戦い、経験を重ね、リーダーシップや慈悲深さ、機転の早さを証明する。オデュッセウスがイタケへ帰還するころまでには、テレマコスは王の身分に相応しくなっている。そしてオデュッセウスだけがイタケの国に秩序を戻すことができるのである。

②オデュッセウスにみる英雄の特徴

オデュッセウスの特性を挙げると、知性、勇気（勇敢）、決断力、倫理観、深い情、自制心、怒り、口の達者、戦略的、きびしい態度、肉体的な力、気配り、思いやり、努力、忍耐力、指導力、洞察力、慈父の如く優しい、気高い（高貴）、不撓不屈の精神などがある。

英雄たちは単純であるが、オデュッセウスは多様で複雑な性格の人物である。彼は高貴で勇敢であると同時に人を裏切ったり残酷なこともした。外見上、彼は英雄にふさわしからず、単足で赤毛であったらしい。小さな取るに足らない国イタケのリーダーの彼がギリシア神話のなかで最大のヒーローの一人となったのは、彼の肉体的な力によるよりは、むしろ智謀、判断力、企画力、説得力などの優れた知性で次々と出し抜いていくところによるものと考えられる。

③最高の人間こそ神の保護

オデュッセウスは女神カリュプソの虜になっているが、最も大切にしている故郷や家族や国民を偲んで嘆く、情の深い人間の姿を浮き彫りにしている。また、部下たちをけって見捨てず、部下たちが自分の命令に従わないときでさえも、彼らのために最善を尽くす。太陽神の聖牛を殺して食料にしたときも、記憶を喪失させるロトスの実や人を豚に変えるキルケの魔法に対しても、オデュッセウスはいつも部下たちを守ろうとする。仲間の何人かをどうしても見捨てなければならなかったとき、運命の定めを嘆いて彼は言う。「幾多の苦しみを味わったわたしではあるが、これほどの憐れな光景を目にしたことはかつてなかった。」³⁾(第12歌)その後、冥府で母アンティクレイアに会い、影となってしまった母の体を抱擁しようとしたとき、オデュッセウスは涙をおさえることができなかった。賢さ、忍耐強さ、強い力にもまして、彼は何よりも情け深い人間なのである。

彼の肉体的な力、精神的な力（気配り、思いやり、努力など）そして知力（智謀、判断力など）も、部下を助ける手立てにはならなかった。しかし、オデュッセウスだけが一人生き残ってイタケへ帰るといことは、彼の優秀性を確認することであって、部下たちを全員死なせたリーダーシップのまずさを描いている訳ではない。最高の人間こそ、神の保護を必要としていないにもかかわらず、最高の人間が神の保護を受けるといふ、ホメロスの考えは興味深い点である。

④傲慢は人間の最大の悪

一眼の巨人キュクロプスとの出会いの場面では、勇敢で機転がきくが、やや傲慢すぎて自分を困難な目に陥れやすい若いオデュッセウスが描かれている。部下たちを危険な目にあわせたり傲慢さにより神々を怒らしたり、一瞬のひるみや判断の甘さが、すべてをだいなしにする危険性を持っていた。ホメロスは、オデュッセウスの傲慢さと自信過剰が一瞬のバランスの乱れで悲劇が起こることを、明確に描いている。英雄も自分が犯した誤りに苦しむ。つまり英雄でさえも、自分の誤りから学んでいくことを知ることができる。

イタリアの神聖ダンテ（Dante Alighieri）は『神曲』地獄篇第六歌で、腐敗した人間の精神にすぐさま、とりつく3つの悪徳は傲慢と嫉妬と貪欲であると指弾している。また、フランスの作家・啓蒙思想家ルソー（Jean-Jacques Rousseau）は傲慢から生じる錯覚は悪の最大の源と言っている。

⑤ホメロスの死生観

第11歌、冥府への旅の話は、ウェルギリウス、ダンテ、ジョイスなど多くの作家たちに模倣されている。

「駿足の勇士（アキレウス）の霊は、泣きながら翼ある言葉をわたしにかけていうには、「……………ここはなんの感覚もない骸、果敢^{むくろ}なくなった人間の幻にすぎぬ者たちの住む場所であるのに。」こういう彼にわたしは答えていうには、「ペレウスが一子、アカイア勢にあっても他の比類なき勇士アキレウスよ。……………おぬしの方はしかし、アキレウスよ、これまでもおぬしより仕合せな者はいなかったし、今後^{かわ}もそれは渝るまい。以前おぬしが世に在った時は、われらアルゴス勢はみな、おぬしを神同様にあがめていたし、今はまたこの冥府に在って、おぬしは死者の間に君臨し権勢を誇っているではないか。さればアキレウスよ、死んだとて決して歎くことはないぞ。」こうわたしがいうと、彼は直ぐに答えて、「勇名高きオデュッセウスよ、わたしの死に気休^{きやす}めをいうのはやめてくれ。世を去った死人全員の王となって君臨するよりも、むしろ地上に在って、どこかの、土地の割当ても受けられず、資産も乏しい男にでも傭われて仕えたい気持ちだ。……………」⁴⁾（第11歌）これは冥界でのオデュッセウスと死んで冥界に降ったアキレウスとの会話である。

トロイア遠征の企てがもちあがったとき、アキレウスはまだ少年であった。母親の海の女神テティスは彼の未来を予言して、戦場で後世にまで謳われる誉をあげて若死にするか、故郷で無事平穏な一生を全うするかどちらかだと告げる。アキレウスは前者を選び、トロイア遠征で武勲をあげるがパリスに踵を射ぬかれて戦死する。

英雄たちは訓練に満ちたこの世に生まれ出ることを喜び、武勲によって、あるいは受難によって、後

世に名を残すことを生甲斐とした。英雄の最後は、最も美しく輝かしい生命の花火の燃焼でなければならぬのである。死は人生の完成の瞬間なのである。死の重視は、生命をあまりにも愛したために、無為のままいたずらに齢を重ね老醜をさらす生きるに値しない生命をさげすんだのである。

人間は死をどうすることもできない。人間ははかない有限的存在者なのであり、どれほど英雄的な光輝に充ちていても、悲劇的にならざるを得ないのである。人間の真の姿を悲劇として眺めていたのである。アキレウスは英雄ではなく、たとえ奴隷の生であっても生きた方が善いとまで言っている。人間の命は儂いから貴重だと信じていた。今の命は永遠に続かないからこそ、人間ならではの強烈で艶やかな神も羨むような経験ができる。死と隣りあわせだから英雄にもなれるし、心から愛することもできる。今ある命を大切に生きよ！と。この世だけが問題なのであることがわかる。これは古代ギリシア人の人生を映し出していると言える。

⑥偽装について

偽装の相互作用（お互いを認知するシーン、求婚者たちの腕くらべのシーン、変装、味方や敵の区別など）こそが、最も重要な文学上のしかけとなっている。偽装は、常に作品のテーマと全体にわたる芸術的意図を強調するために使われているのである。

オデュッセウスが上陸した島が祖国と知らなかったことが、最初の偽装である。目を覚ましたオデュッセウスは変装した知恵の女神アテナに出会う。自分の正体を隠すため、クレタの王子だと名乗って、手の込んだ作り話をする。アテナの力でボロをまとった物乞いの老人に変身したオデュッセウスは、オデュッセウスの召使いであった貧しい豚飼いのエウマイオスに会う。オデュッセウスに対して忠実であるにもかかわらず、自分の正体を明かさない。味方をテストし、敵について学ぶため、手際よく嘘と真実を混ぜあわせるのだった。物乞いの姿になることにより、自分の民の道徳的価値を判断し、味方を集めることができるのである。

第13歌から第14歌では、偽装が多く使われる。オデュッセウスと知ったときに、その道徳的な適合性が明らかになる。オデュッセウスの求婚者たちへの急襲が、狡猾にかつ策略的になされる。

偽装は、認知のシーンでも使われる。番犬が自分の主人を見破れなく、エウマイオスが止めなければ、オデュッセウスを殺すところだった。秘密につきものの危険性を意味し、筋書きに緊張とサスペンスを加える。アテナが一時、オデュッセウスの変装を解き、その正体を息子テレマコスに見せるが、テレマコスは性格的、そして宗教的な素朴さから、彼が父ではなくどこかの神に違いないと言い張る。

もう一つは、今はすっかり年老いて誰にも面倒をみられていないが、若いころは名猟犬で、美しく力強かった飼犬アルゴスもないがしろにされている。糞の中で臥^たっていたアルゴスは「オデュッセウスの姿に気付くと、尾を振り両耳を垂れたものの、もはや主人に近付いてゆく力はなかった。……………」⁵⁾ (第17歌)「犬のアルゴスは、二十年ぶりにオデュッセウスに再会すると直ぐに、黒き死の運命の手に捕らえられてしまった。」⁶⁾ (第17歌) 自らの愚かさゆえに目が見えない人間たちは、この忠実で老いた犬が気が付くものに気がつかない。エウマイオスとテレマコスと老犬以外は誰も気づく者はいないのである。

偽装の効果により、求婚者たちには道徳が欠如していることがよくわかる。ここでは倫理的、道徳的

に正しく振舞わなければ、より不面目な挫折に到達することが暗示されている。

求婚者たちはみな、傲慢にふるまっており、オデュッセウスの正体にまったく気づいていない。求婚者たちの無知、傲慢さ、不道徳は、名誉と正義と秩序をきびしく追及するオデュッセウスの自制心、鍛練、喜びをあとまわしにする能力と、きわめて対照的である。求婚者のアンティノオスとエウリュマコス、横柄で暴力的で貪欲である。情け深いオデュッセウスの性格と対照的である。社会的に身分が高く、裏切りが大きければ大きいほど、偽装はおそろしく、激しいものになる。彼らは英雄ではなく、最高のものを追うという概念をまったくもっていない。彼らこそが破滅されなければならないことがはっきり語られている。

宮殿では、アテネに知恵を授けられたペネロペは、オデュッセウスのかつて所有していた強力でおそろしい弓を引くことができた者と結婚すると宣言する。誰もが失敗し、必然的にオデュッセウスの手に入ることになる。さらなる偽装として、求婚者たちは、自分たちを破滅させることになる道具を、自ら死刑執行人オデュッセウスに手わたしたのである。すべての求婚者たちは討たれて命を落とし、復讐は終わる。

⑦中庸の精神

最後の章では、オデュッセウスの戦いにおける勇敢さ、度胸、決断力が示される。それにもまして、強烈な集中力と粘り強さである。求婚者たちを倒すことと、国に秩序を取りもどすことに集中するあまり、無実の人物である宮廷詩人ペミオスをも殺しそうになるが、テレマコスに止められる。もしもこの殺人を犯せば、オデュッセウスにとって不名誉なことになり、復讐の正当性を傷つけてしまうことになる。

自分の乳母エウリュクレイアがオデュッセウスの無事の帰還に喜びをあらわそうとしたときに、彼は彼女を暴力的に脅かす。このような強烈さがオデュッセウスの特徴の一つでもある。しかし、戦いが終われば、彼の怒りも静まり、勝利の喜びの叫びもあげなければ、自慢することもない。キュクロプスとの戦いのときに見るような、若いころの傲慢や自惚れはオデュッセウスには、まったく見当たらない。

「乳母は累々たる死体と夥しい血潮を見るや、大業の成ったのを目の当たりして歓声をあげようとしたが、オデュッセウスは乳母がしきりに声を立てようとするのを制してやめさせると、老婆に翼ある言葉をかけていうには、「婆やよ、胸の内だけで喜び、我慢して喜びの声は立ててくれるな。殺された者たちの前で功を誇るのは、許されぬことじゃ。彼らを滅ぼしたのは、神々の定めと彼ら自身の犯した悪事であったのだ。彼らは訪れて来る者を貴賤の別なく、一人だに大切に扱おうとしなかった。されば彼らは己れの無法な振舞いによって、悲惨な最期を遂げたのだ。……」⁷⁾ (第22歌)

このような急激な心境の変化、なぜオデュッセウスは突然復讐心を捨ててしまったのだろうかという疑問が生まれる。それは、彼の今までの経験や自制心の強さ、そして自分自身で啓発した倫理観からきていると考えられる。オデュッセウスは、過大と過小との両極の正しい中間を知見によって定めることで、その結果、質的に異なった卓越した徳の次元に達したものと考えられる。これはアリストテレスの徳論の中心概念であるところの中庸に通じるものであると考える。

⑧夫婦の愛のあり方

戦いが終わり、求婚者たちは全滅し、宮殿はきれいになった。しかし、オデュッセウスが妻ペネロペに近づくと、彼女は喜びや情熱などの感情をあらわすかわりに、静かに驚きのみせただけであった。夫が20年の歳月を経て無事に帰ってきたことに驚き、啞然となってしまったのであろう。彼女の望み、夫の帰還と求婚者たちの一掃がかなったことを信じるができなかった。オデュッセウスは妻に辛抱強く振舞い、自分自身の強い感情を表に出すことを控えた。彼らは似合いのカップルで、二人がいかに互いを思いあっているかがよくわかる。二人の再会の場面は非常に洗練されている。彼らの愛は成熟して悟った愛である。オデュッセウスとペネロペの愛は、経験を積み、対等の個人の間で育った円熟した愛である。ホメロスは、一番大切なのは栄光や名声ではなく、家族、ささやかな家庭生活と説いていると考えられる。

ふたりの婚礼の寝台の話から、妻は夫と確信でき、ふたりは喜びと安堵の涙を流す。ホメロスは次のすばらしい比喩を用いている。「海的神ポセイダイオンに打ち砕かれ、泳ぎ逃れるその目の前に、嬉しくも陸地の影が現われる時のように …… 」⁸⁾(第23歌)

5. おわりに

ギリシア人は、ホメロスの『イリアス』と『オデュッセイア』の二大叙事詩から、半神にも似た英雄たちの豪壮な生き方を学び、それを自分たちの人生の糧とした。ギリシア人はホメロスの中に人間の典型を求めたのである。

『オデュッセイア』の物語の主人公オデュッセウスはアテナの加護を受けつつ、持てる力をふるって精一杯に生き抜く生きざまは、今日の私たちにも大きな勇気を与えてくれる。オデュッセウスは自己に対する信頼と、生に対する執念を手放さない。彼は常に工夫し、説得し、大胆に行動した。オデュッセウスは道徳的に正しく成長し、勇敢に行動し、艱難辛苦を乗り越えて、偉大なことを成し遂げる。われわれは、無限の可能性を秘めた英雄や秩序と伝統の世界を知り、そしてわれわれ自分自身のことをより深く理解できるようになるのである。

現代に生きる私たちは、人類史上もっとも豊富な知識と技術をもち、もっとも賢明であると思っている。しかし人間がどれほど進歩し、どれほど立派になったのか、大変疑問である。人間が技術的文明において進歩したということも大切だが、どれほどその精神において進歩し、高貴となったか、ギリシア神話はこの問いを私たちに投げ続けている。近年、技術的業績の水準は急カーブで上昇しているにもかかわらず、人間の倫理的行為の水準は、少しも向上していない。技術と倫理の格差は、かつてないほど開いてしまった。だからこそ、「人間の尊厳」「生命の尊厳」の確立を目指しゆく哲学と教育の再生が必要であろう。

引用文献

- 1) ホメロス著、松平千秋訳『オデュッセイア 上』岩波文庫 1994 11頁
- 2) 前掲書1) 242頁

- 3) 前掲書 1) 322 頁
- 4) 前掲書 1) 299 頁, 300 頁
- 5) ホメロス著, 松平千秋訳『オデュッセイア 下』岩波文庫 1994 133 頁
- 6) 前掲書 5) 134 頁
- 7) 前掲書 5) 272 頁
- 8) 前掲書 5) 290 頁

参考文献

- アポロドーロス著, 高津春繁訳:『ギリシア神話』岩波文庫 1953
- カール・ケレーニイ著, 植田兼義訳:『ギリシアの神話 英雄の時代』中央公論新社 1985
- 呉茂一著:『ギリシア神話』新潮社 1969
- ジャクリーヌ・ロミート著, 有田潤訳:『ホメロス』白水社 2001
- 高津春繁著:『ギリシア神話』岩波新書 1965
- トマス・ブルフィンチ著, 野上弥生子訳:『ギリシア・ローマ神話』岩波文庫 1978
- 西村賀子著:『ギリシア神話』中公新書 2005
- バーナード・アヴスリン著, 小林稔訳:『ギリシア神話小事典』社会思想社 1979
- ピエール・グリマン著, 高津春繁訳:『ギリシア神話』白水社 1992
- フィンリー著, 下田立行訳:『オデュッセイアの世界』岩波文庫 1994
- マイケル・グラント / ジョン・ヘイゼル共著, 西田実ほか共訳:『ギリシア・ローマ神話事典』大修館書店 1988
- マニオ・ムニエ著, 原章二 松田孝江訳:『ギリシア神話』八坂書房 1979
- 山室静著:『ギリシャ神話』文元社 2004